

〈原著論文〉

盲学校小学部国語教科書における点字触読導入教材

進 和枝*・牟田口辰己**

昭和4年から平成17年までに文部（科学）省から発行された盲学校小学部国語教科書に掲載された点字触読導入教材を比較検討することにより、盲児に対する点字触読教材の在り方を検討した。その結果、現在の点字触読導入教材には見られない、①学齢児のみならず、加齢児のための学習教材、②触り方の基礎学習を意図した触読導入教材、③点字未習得の盲児に配慮したページ表示、④両手を効率的に用いる読み方を促す教材、についての工夫がなされていたことがわかった。さらに、点字指導の方法には唯一絶対というものはなく、基礎基本を踏まえた点字触読指導が大切であることが分かった。点字指導の必要な対象は、盲学校に在籍する1年生、中途視覚障害児、重複障害児、通常の学級に通う盲児まで幅広く考えられる。彼らにより良い教科書を提供するためにも、これらの事項は点字教科書における触読導入教材の検討課題であるといえる。

キーワード：盲学校、国語教科書、点字触読導入教材

1. 目的

触覚的な情報は自ら主体的に触ろうという意欲がなければ正確には獲得できない。特に点字は、3点2列の6点の配列で様々な音を表すという高度な記号体系であり、その読み書きは、極めて高い操作的行動を必要とする（文部省、1984）。したがって盲児は、周到に準備された教材を通して初めて点字を触読できるようになるといえる。

通常、点字触読の学習は、盲学校小学部に入学してから行われている。その教材は、盲学校小学部国語教科書1年第1巻にあり、検定教科書にはない独自の点字触読のための導入教材が最初に追加されている。そしてこの点字教科書は、文部（科学）省著作教科書として昭和の初期から発行されてきた。

本研究は、我が国で発行された文部科学省著作国語教科書の点字触読導入教材の内容を比較検討し、今後の点字触読導入教材の在り方を検討することを目的に実施した。

2. 方法

これまで文部（科学）省から発行された盲学校小学

部国語教科書のうち、実際に入手できた、昭和4年（甲種・乙種）、昭和43年、昭和48年、昭和58年、平成8年、平成14年、平成17年発行の1学年用点字教科書と点字教科書編集資料、及び昭和38年発行の盲学校小学部国語学習指導書から、点字触読導入教材の内容を比較検討した。

3. 結果

Table 1 は、点字導入教材の特徴を発行年度別にまとめたものである。導入教材とは点字学習のために特別に追加された内容であり、レディネス教材とは導入教材のうち文字読みとりの学習に入る前段階となる点の位置の弁別学習や行たどり・行移し等の学習内容である。なお、サーモフォームとは真空成型による触図作成方法で、点の位置の弁別学習のためのレディネス教材の一部として挿入されたものである。以下、各年度教科書の特徴の詳細を示した。

(1) 昭和4年発行教科書

明治から大正にかけての盲学校用教科書は、主に一般の小学校の教科書の点訳本であったが、昭和4年から昭和9年にかけて発行された「盲学校初等部国語読本」全12巻は、我が国最初の文部省著作国語点字教科書であり、盲児のために独自に編集されたという大きな特徴を持つ教科書であった。その編集方針について

* 筑波大学附属盲学校

** 広島大学大学院教育学研究科

佐野 (1930) は、「なるべく普通の読本から離れないようにして、而も盲人に不適當と思われる材料は、そのものにより、あるいは省き、あるいは書き換え、上級の方へ送る」と述べている。また、保護者向けに全巻にわたり墨訳 (点字を仮名書きに翻訳すること) が巻末に掲載されていた。当時需要の多かった「尋常小学国語読本」を基本に、「尋常小学読本」の内容も合わせ、この2冊を原典として作成し、しかも盲学校独自の教材も加えてあったことから、この墨訳は教師にとっても便利なものであった。さらに、盲児の特性を十分考慮し、盲児のために編集されたので、低学年の教科書では言葉の修正が行われたり、第5学年で杉山検校と山田検校、第6学年でルイ・ブライユとヘレン・ケラーなど盲偉人の伝記を掲載したり、巻一 (乙種) に、「はな」と「はた」の絵 (Fig. 1)、巻十二には漢数字など、全巻にわたり点図を多く用いていることも特徴である。

1年用の点字触読導入教材についても様々な工夫が見られる。その一つは、甲種と乙種の2巻が発行されたことである。2種発行した理由は、当時盲学校には通常の1年児童よりも年齢の高い児童が入学することが多く、知識や経験が豊富な児童のために編集した教科書が必要である一方、学齢児童のための教科書も必要であったためである。いずれを選ぶかは学校の方針によった。点字触読導入教材について甲種は、五十音系列で文字を選択、配列し、次いで五十音を含んでいることばをあげていく方法がとられている。つまり、母音の「ア・イ・ウ・エ・オ」を学習した後に「アオ・イエ」等のことばを、「カ・キ・ク・ケ・コ」を学習

した後に「アカ・イケ・キク・カキ」等のことばを学習する方法である。例示のことばは2文字を原則とした。ローマ字のように、母音と子音を組み合わせる方法であり、しかも無意味なことばではないので、年齢の高い児童には五十音系列で文字を提示する方法が有効であると考えられた。反面、「オケ (桶)・ソコ (底)・ウス (白)・コテ (鍔)・ヒシ (菱)・ヘタ (帯)」等、子どもにあまり親しみのない言葉がたくさん出てくるため、ことばを知らない、あるいは模型を与えても説明しがいのようなことばが出てくるのが欠点であった。そのため、「6・7歳の児童には理解興味を伴わず、文字の会得に悪影響がないともいえず、児童にとっては負担である」と川本 (1929) は指摘している。これに対し乙種は、弁別しやすい点を含む文字から提示し、児童が親しめ、発音の容易な語を取り上げており、その文字選択配列の配慮点として次の6点を挙げている (川本, 1929)。

- (イ) 点が区別しやすいこと。
- (ロ) 文字を児童の親しめることばと連絡すること。
- (ハ) 発言の容易なるものより進むこと。
- (ニ) 必ずしも急いで多くの異なった文字を教授し、注文的に記憶せしめることを主としない。漸次に練習し、繰り返す間に之を記憶せしめ且つ応用の力を練ること。
- (ホ) 単語の名詞を少なくし、単語教授の弊を防ぐ為に、比較的早く句ついで文章を提出したこと。
- (ヘ) 文字及びことばの練習の為に、補充教材又は応用教材を各地で選択し教授し得る余裕を存したこと。

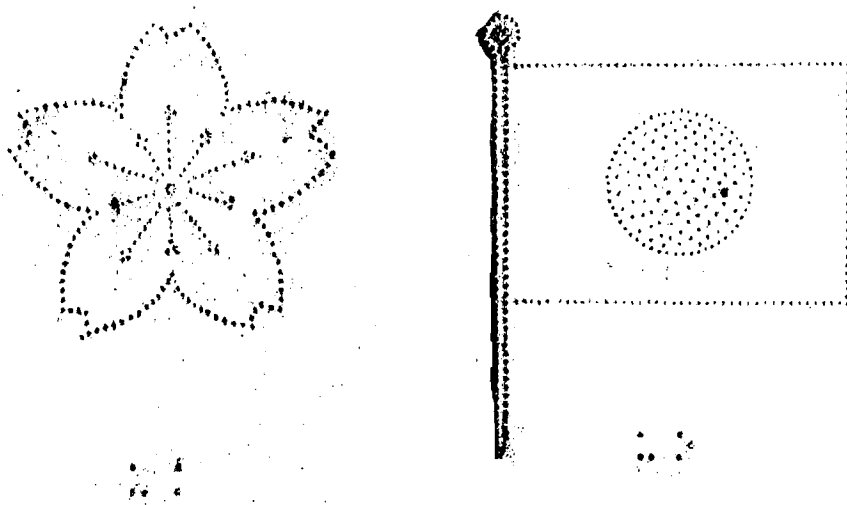


Fig. 1 昭和4年教科書に掲載された点図 (左「はな」、右「はた」)

Table 1 点字導入教材の特徴

発行年	昭和4年		昭和38	昭和43	昭和48	昭和58	平成8	平成12	平成14	平成17				
	甲種	乙種												
版の体裁	B5版横長		不明	B5版 縦長										
第1巻 頁数	24	24	50	50	87	160	196	196	134	130				
導入教材 頁数	24	24	50	50	58	108	119	119	59	59				
レディネス 教材数	0	0	20	20	22	43	55	55	24	24				
サーモ フォーム	0	0	0	0	5	4	4	4	4	4				
編集方針 編集内容	盲児用に独自に編集したもの。 年長者向け	盲児用に独自に編集したもの。 学齢児童向け	1. 1年上を「てんじのおけいこ」として編集した。 2. 前半は、点字触読の基盤としての感覚訓練に重点を置いた。 3. 後半は、点の組合せによる識別の難易度を考慮に入れて日常語を配列し、50音など基礎点字の習得を目指した。 4. 単に点字の習得のみに留まらず言語指導の基礎と生活経験の拡充のねらいを合わせはたそうとした。			ア. 当初から両手読みを指導すること。右手読みより左手読みを重視する。			ア. 読み速度の左右差が大きくなるように留意する。					
												イ. 手指の行たどり、行がえ動作の訓練をどの頁でも重視する。		
												ウ. 点の位置の弁別訓練を十分に行うこと。安易に文字指導に進まないよう留意する。		
												エ. 練習教材がなお不足する場合は児童の能力に合わせて練習教材を作成する。		
												オ. 点の位置の弁別以降の教材では点の位置を確認する手がかりとして「メの字」を用いた。		
			偶数ページ の教材は練習用の補助教材とした。		「点字学習指導の手引き（改訂版）（平成7年文部省）で示された、新しい指導法に合わせた教材を追加した。		必要な内容を精選しているので盲児童の実態に応じて適切な補助教材を準備することが大切である。							
特徴	大きい点字		標準サイズの点字											
	50音系列で文字を提示	弁別しやすい文字から提示	①点字触読の基礎となる感覚訓練の段階 ②点字を「形」として識別する練習の段階 ③点字をことばとして読む練習の段階	点字形を線パターンで指導するサーモ教材		点字読み熟達者の方略に基づく教材の導入								
		両手読み教材	レディネス教材が追加される							導入教材の精選				
		点図2枚												
	ページ数 数字表記		導入教材のページ表記に、大点と小点、及び小点4つの組合せを使用し、点字未習得の盲児にも分かるように配慮			ページ数 数字表記								
点字学習 指導の手引の発行						昭和50年版		平成7年版		平成15年版				

巻一に掲載された文字は、甲種乙種ともに、五十音の清音全部と濁音・半濁音の一部、長音、促音、一から十までの数字に限られ、拗音は第二巻に掲載されていた。

版の大きさは、児童に取り扱いやすい大きさとし、通常の点字図書が縦長であったのに対し、横長であった。その理由は2点ある。1点目は文字の入る量は横長の方が多いことである。つまり、上等の紙を使用するので1ページに入る文字を多くした方が安価になるためである。2点目は、両手読みの練習を促すことが目的である。乙種では両手読みの指導を重要視したため、ページ真ん中に縦線を1本引き、左半分を左手、右半分を右手で読む方法が提案されていた (Fig. 2)。川本 (1929) は「点字を読むのに、左指または右指のみで読むのと、両手で一行ずつ読む、両指を用いるのであるが同時に用いないで左指で左半分を右指で右半分を読むと四種ある。最も迅速に読み得るのは第四番目に書いたものである。左手で左半分を読み、右手で右半分を読む練習をすると書物が大きくても迅速に読める。第一行目の後半に至ると、右指で読む間に、左指は第二行目の最初に触れている。そうすると左指はその運動距離が短くて都合がよいばかりでなく、右指の最後の文字または言葉と二行目の最初の文字または言葉との連絡もつきやすい。その結果読書が自然に早くなる。文章を写す場合においては左手、文章を読む場合には左右の指で各行半分ずつ読む練習をつけることが最も有利であり適切であると思う。左右半分を読むということは、英国の読人の読書や、本邦人に調べたが疑問はない。今述べたごとくか否かは今後の研究

を期待する」と指摘した。なお、甲種乙種の後半部分は共通の教材となっている。

さらに巻一と巻二では点字の大きさが現在のものよりも大きくなっていた。これは点間や字間を空けて、容易に触読できるように配慮したものと思われる。しかし佐野 (1929) は、「字が大きすぎて分からないという説がある。これは習慣によるのである。第三巻からは小さくする」と述べている。中途失明の大人に有効とされる大きな点字も、指先の小さい盲児にとってはかえって読みづらいことによる反省と思われる。

(2) 昭和24年発行教科書「よにんの いいこ」

戦後最初に完成したのが盲学校小学部国語第1学年用教科書「よにんの いいこ」(文部省, 1949) である。これは、満6歳の全盲の児童が学習の中心となるものと予想して作られ、内容は物語となっており、盲児の生活を中心とした。盲児は世間の習慣や礼儀作法等に欠けるおそれがあるとの配慮から、あいさつや晴眼児と遊ぶ教材も取り上げた。また、視覚によらなければ理解できないような表現は避け、聴覚、触覚に関係することを主に取り上げている。使用時期としては、この教科書を使用する以前の訓練期間を約4週間とみて、およそ5月上旬頃となる。それ以降10月中旬まで約17週間に渡って使用する予定としている。しかしながら「訓練期間4週間」の内容は掲載されていないため、その詳細は不明である。

(3) 昭和38年発行教科書

昭和38年には「盲学校小学部国語学習指導書」(文

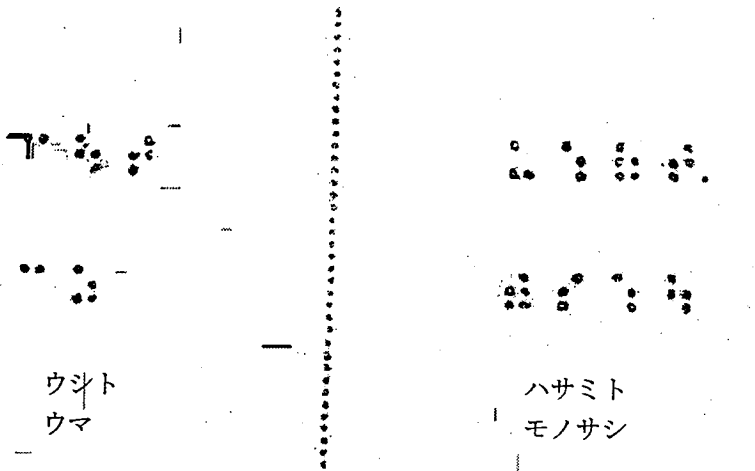


Fig. 2 昭和4年教科書6ページに掲載された両手読み用教材

部省、1963)が発行された。これによると、「従来の点字教科書については盲児童の事物認識の特性や点字表記の特質等の面から、なおいっそうの配慮が望まれる点が多くなかったため、今回これらの点を考慮して新教科書を作成した。今回の教科書作成に当たっては特に点字触読に関し、その基礎学習を効果的にし、さらに点字指導の体系を整えることとともに、盲児童の特性に適応した題材の選定およびその内容の構成に重点を置いた」ことが記されている。特に配慮された事項が、点字の初期指導である。「点字初歩指導の合理化と系統化を図るため、1年上を『てんじのおけいこ』として編集した。それは、新入児童のための点字初歩指導の教科書を求める声が高まってきたためである。この前半では点字触読の基盤としての感覚訓練に重点を置き、後半では点の組合せによる識別の難易度を考慮に入れて日常語を配列し、五十音など基礎点字の習得を目指すものとした。ただし、前後半共に、ゲーム化、パズル化等の取り扱いを通じ、単に点字の習得のみに留まらず『きく』『はなす』など言語指導の基礎と生活経験の拡充のねらいを合わせはたそうとするものである」ことが記述されていた。この点字触読導入教材は、現在の基礎となったものであり、①点字触読の基礎となる感覚訓練の段階、②点字を「形」として識別する練習の段階、③点字を「ことば」として読む練習の段階の3部に構成されていた。

①点字触読の基礎となる感覚訓練の段階

文字導入以前に、「ながさくらべ」、「ひろいみちせまいみち」、「きれめをさがそう」、「くじびきあそび」、「陣取りゲーム」、「すごろく」などの表題で、文字学習のレディネスとなる教材が挿入された。ここでは、指頭の触覚訓練だけでなく、手指の巧緻の訓練も合わせて行わなければならない。したがって、「おはじき拾い」、「ジャンケン遊び」、「つみ木ならべ」、「ひも通し」などの作業が適宜取り込まれている。文部省は1984年に、「視覚障害児の発達と学習」を発行したが、ここには点字のレディネスとしての手の操作と認知として以下の7項目を取り上げている。

- (ア) 手のひらで平面をまんべんなくで、必要な部分に着目して指先で詳しく調べる。
- (イ) 物を平面で直線的に移動させたり、縦横斜めなど様々な方向の直線を両手でたどる。
- (ウ) 左手の人差し指を出発点において右手の人差し指で様々な方向の直線をたどる。
- (エ) 十字形に交わった線をたどるなどして左中右、上中下の方向を理解する。

- (オ) 上下左右の中から2方向を組み合わせて左上、右下というような位置の定位をする。
- (カ) 円・三角・四角など簡単な図形を弁別する。
- (キ) はめ板などを用いて円・四角・三角などの形をはめ込む。

昭和38年発行教科書で示された事項は、その発端となるものであり、当時から盲児にとって両手指を十分活用できるよう指導することの重要性が指摘されていたことが分かる。

②点字を「形」として識別する練習の段階

第1段階で「ア・ニ・ナ・イ」の4文字、第2段階で「フ・レ・ウ・メ」の4文字、第3段階で「ヤ・カ・ク・ヌ・ハ・ユ」の6文字、第4段階で「ヒ・ヲ・ン・ワ・オ・ラ・エ・ル」の8文字、第5段階で「リ・ロ・ス・ネ・キ・ヨ・ノ・サ」の8文字、第6段階で「タ・コ・チ・ソ・ト・シ・ム・ヘ」の8文字、第7段階で「ツ・ケ・マ・ホ・ミ・モ・テ・セ」の8文字を提示している。この配列は、点の数と位置、及び相互の類似・対称などによるものであるが、厳密な意味での難易の順序を示すものではないと指摘し、「つめ込み主義にならないように」との注意があった。そして、新入盲児には、五十音構成の理論（ア行に六の点はカ行）は必要なく、点の位置も「左の上」「左の中」「左の下」「右の上」「右の中」「右の下」などの呼称を用いる方が適当であると指摘した。また、配列の特徴として、「ヤ」と「カ」、「ク」と「ヌ」といった、鏡文字となる文字を同時期に提示している点である。

③点字を「ことば」として読む練習の段階

作業や遊びの中で「話す」「聞く」などの言語学習を深めながら「ことば」としての点字に習熟させること、関連用語のカードの併用が極めて重要であることが指摘され、「アメアメ フレフレ」「ウメノ ハナ」「カサト クツ」「ドーブツノ ナキゴエ」「ドーブツノ ヨース」などの表題で、自然の様子、身の回りの生活に関することばを中心に取り上げられていた。また、文字の学習にとどまらず、「ウメ・ハナ」を学習するときには季節の花々に触らせること、「カサ・クツ」と学習するときには雨の日の体験を話し合ったり、雨の歌などを歌うこと、動物の鳴き声「イヌワ ワンワン ウマワ ヒンヒン」の学習では、実物や剥製などを触らせて身近な動物について話し合いをさせるなど、指導上の留意点が詳細に書かれている。

これら3点の他にも、まだ点字が読めない児童が触ってページ数が分かるよう奇数ページの右上に小凸点で1～9ページを、大凸点で10ページを示す配慮

(Fig. 3) や、関連用語のカードを用いた補充教材作成の留意点、さらには、点字触読の正しい姿勢、手指の運動、触読の圧力への配慮の必要性も指摘されていた。

(4) 昭和43年発行教科書

点訳に当たっての原本の加除修正は昭和42年頃からは最小限にとどめられることになった。これは盲学校就学者のうち、弱視者の占める率が全体の60%にも達しており、同じ教室で全盲者と別々の教科書の内容で指導することが困難であること、また全盲であるからと言ってことさらに一般とは異なった内容のものを指導する必要はなく、指導技術の面で特別な配慮をすればよいという考え方が強くなってきたことによるものである(大川原, 1976)。しかし、点字触読導入教材は、原本となる教科書には含まれておらず、独自に追加の必要な必須の内容である。また、昭和43年には点字触読教材の中には、現在の算数1年第1巻に見られるような点図の「渦巻き」「複合図形の線たどり」などの触察導入教材が掲載されていた。当時の算数教科書1年生第1巻にも、「うずまき」「ふといせんをたどりましょう」「ながさくらべ」などの教材があり、国語と算数の双方の教科で両手を使った触察の指導が重要視されていたことが分かる。

(5) 昭和48年発行教科書

この年、初めて点字導入教材にサーモフォームで作成された教材が5つ加わった。このサーモフォーム教材は現在も掲載されているが、この年は、現在は削除されている「センワ ドチラムキデショー」の課題があり、点字の形を線パターンとして捉えさせる教材が導入されていた(Fig. 4)。これらは、「一」「|」「/」「\」「L」「<」などの線図形を最初に理解させ、次ページに「¨」「:」「.」「.」「.」「.」「.」などの点字形への導入を意図したものである。しかし昭和52年以降、この教材は削除されていた。

さらにこの年から「オナジ カタチヲ サガシマショー」の教材が追加された。そして、昭和38年の、②点字を「形」として識別する練習の段階、③点字を「ことば」として読む練習の段階が同じページに提示されるようになった。つまり、ページ上部で「ア」「メ」「フ」「レ」の文字を1マスあけて学習したあと、同じページの下部で「アメ」「フレ」のことばを学習していくのである。この形式は現在まで変わっていない。1マスあけて文字を提示した理由は、触読のしやすさと、音節との対応を明確にするためである。文部省(1975)が初めて発行した「点字学習指導の手引」には、「音節と対応させて文字を習得させようとする場合、



Fig. 3 点字未習得の盲児にも分かるページ表記
(上段は、四つの小点のかたまりが10、小点が1、下段は、大点が10を、小点が1を示して、16ページであることを表す)

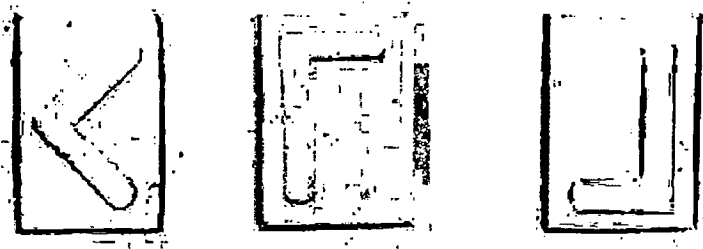


Fig. 4 線パターンのサーモフォーム教材(昭和48年)

構成の単純な音節から指導するのが当然であろう。最も調音活動の単純なものはア行音であるから点字の指導もア行の文字から指導することにする」。さらに、どの文字を指導するかについては判断が極めて難しいとしながら、「一般的には音節の作り方・発音のしやすさ・使われる頻度数などを考慮する必要がある。点字の場合には特に字形の安定度ということが重要な要素となる。字形の安定度というのは点字の6点の上下方向と左右方向とが共にそろっているものをいう。マ行・ハ行などの点字である。不安定な字形とは右側の欠けている「ナ」「ニ」、3・6の点の欠けているラ行などである」としている。また、音節の作りや発音のしやすさも極めて大切な要素であるとし、「どのような文字（行）からどのような順序で指導すればよいかということについて現在のところ定説はない」としている。

(6) 昭和58年発行教科書

昭和49年より原典教科書をどのように編集したかについて解説した点字教科書編集資料が発行されている。その中に点字触読導入教材に関する記述が掲載されたのは昭和58年発行からである。その事項は以下の5項目である。

- ア. 当初から両手読みを指導すること。右手読みより左手読みを重視すること
- イ. 手指の行たどり、行がえ動作の訓練をどの頁でも重視すること
- ウ. 点の位置の弁別訓練を十分に行うこと。安易に文字指導に進まないよう留意すること
- エ. 練習教材がなお不足の場合は児童の能力に合わせて練習教材を作成すること
- オ. 点の位置の弁別以降の教材では点の位置を確認する手がかりとして「メの字」を用いている。

これらの項目は、平成12年に「ア. 当初から両手読みを重視し、読み速度の左右差が大きくなるよう重視する」と変更されたが、その他の内容は現在も変わっていない。

(7) 平成8年発行教科書

「点字学習指導の手引き（改訂版）」（文部省、1995）発行に伴い、平成8年版から点字読み熟達者の方略に基づく教材が挿入された。その内容は、日本語を表す点字を以下の6つに分類し、段階的に学習を進めること、そしてそれぞれの段階では数文字程度を一つのステップとして提示し、継時的な点字のイメージの特徴を把握したり、文字や符号の判断をしたり、それらを

組み合わせて意味のある単語や文として読み取ったりすることなどができるよう指導していくというものである。教材の順序は左半マスだけからなる文字をまず提示し、そしてこれらに右半マスの特定の点を加えた文字を数文字程度の仲間に分け、ステップごとに提示されていた。これらの提示順序は結果として清音の行単位の提示方法と類似することになる。次いで、促音、長音、濁音などの学習をし、左半マスが共通している文字や符号を仲間わけし、ステップごとに学習させる。その結果として、ヤ行・ワ行の文字、数符や第1つなぎ符などを取り上げると共に、清音を表す文字を列単位として整理することができる。

- ① ア行・ナ行・カ行・ハ行の読み取り
- ② タ行・ラ行・サ行・マ行の読み取り
- ③ 促音符・長音符・濁音・半濁音の読み取り
- ④ ヤ行・ワ行の点字の読み取り
- ⑤ 拗音・拗濁音・拗半濁音の読み取り
- ⑥ 特殊音点字の読み取りと仮名遣いの意識化

点字教科書では、両手読みの動作の制御、次いで1マスあけ、2マスあけのイメージの形成及び行の途中の変化の弁別、さらに、1マスにおける点の上・中・下及び左側・右側の位置の弁別ができるようにした上で、左半マスと右半マスのイメージを合成して、1マスの点字記号を継時的に読み取る枠組みを形成する課題を取り上げられている。その内容は、「ポート テンヲ ミワケマショー」、「ヒダリト ミギヲ アワセマショー」、「ドレト ドレノ クミアワセデショー」、「ドンナ カタチニ ナルデショー」の4タイトルで14ページが追加された。しかし、点字教科書の教材提示の仕方と、「点字学習指導の手引（改訂版）」（文部省、1995）の内容とは異なっており、同じ文部（科学）省の著作であるにもかかわらず、統一された指導法が示されているわけではない。

(8) 平成14年および17年発行教科書

平成14年版以降では大幅な教材の精選が行われた。平成12年版の1年上巻点字教科書は、点字導入教材が追加されて196ページになっていたが、盲児童の利便性と学習意欲の向上を考慮し、120ページあった導入教材を59ページに半減させている。これは、それまでの導入教材を削除したわけではなく、偶数ページに掲載されていた発展教材を省くことによって2分の1になったものである。

4. 考 察

過去の点字触読導入教材を検討した結果、現在の点字教科書からは消滅しているが、現在でも検討に値する内容があることが明らかになった。ここでは、今後の点字導入教材の在り方を踏まえて考察する。

(1) 点字導入教材の分冊化と中途失明の児童にも使用できる点字導入教材の開発

昭和43年版以前の教科書では、点字導入教材が1巻にまとめられて刊行されていた。つまり、学齢の盲児も途中で点字を使用することになった盲児も、同じものを「てんじのおけいこ」として活用できたといえる。しかし現在の点字触読導入教材は、1年国語点字教科書上巻として、原典となる検定教科書の内容と一緒に編集されており、盲学校独自の点字触読指導と国語教科書の内容が同一の教科書になっている。したがって、今後は点字導入教材を分冊化し、いつの段階でも利用できるように教科書配本の態勢を確立することが必要不可欠である。さらに、早期に視覚を活用することができなくなった盲児と年齢の高い中途視覚障害児童生徒の発達段階を踏まえ、触読教材の語彙や内容の難易度等を考慮した教材を提供することも大切である。昭和4年の教科書は両者に配慮した内容で作成されていた。今後、中途失明の児童生徒が使用できる点字導入教材の開発は検討課題といえよう。

(2) 触り方の基礎学習を意図した触読導入教材

昭和43年の国語教科書には、現在使用している算数1年教科書にある触り方の学習教材と類似した教材が挿入されていたことが分かった。このことは、当時から国語と算数の両教科において、両手を使った触り方の基礎学習が1年盲児に必要とされていたことを示している。現在、算数1年第1巻の点字教科書は触り方の本として別冊で配本されている。これを発展させ、1年児童のみならずどの学年でも使用できる、教科学習の基本となる「触り方の教科書」が望まれるところである。

(3) 点字未習得の児童に配慮したページ数表示

昭和38年と43年教科書には、数符を用いた通常のページ表記ではなく、大点と小点の数で表示されており、点字未習得の児童でも一つ一つを数えることでページが分かるような配慮がなされていた。このような細かな配慮は今からでもすぐに可能な事項である。

(4) 両手を効率的に用いる読み方を促す教材

点字触読の効率的な方法として、両手を効率的に用いる方法がある。そのことが既に昭和4年教科書に、「ページ真ん中に縦線を1本引き、左半分を左手、右半分を右手で読む」という具体的な方法が提案されていたことは大変興味深い。この方法も含め、両手を効率的に用いる指導法を例示するのも有効であろう。

(5) 基礎基本を踏まえた点字触読指導

文部省(2003)は、「点字指導の方法には唯一絶対というものはなく、児童生徒の実態に応じて適切な指導方法を検討することが大切であり、言語能力や触覚的な認知能力などの心理的な特性、点字学習への意欲や態度などの個人的要因によって、指導の順序、開始時期、教材の内容・程度の取り扱いなどを工夫・改善する必要がある」ことを指摘している。教科書に示された指導方法は、基本的・原則的なものであり、実際の指導にあたっては、その修正や別の展開が必要となる。教科書の内容を出発点としながら、個に応じた適切な指導方法の開発に努めることが重要であろう。特に、文字提示の順については、「いろいろな考え方があがるが、触覚的に字形の安定しているサ行、タ行、ハ行、マ行などから始めるのが無難である」(文部省、1983)とあるように、絶対的に有効な順序が示されているわけではない。1年生の児童は、「早く点字を覚えたい」と大変意欲を持って入学してくる。そして自分で教科書を読むことができた時の喜びはとても大きい。触圧、触運動等の基本的な配慮事項をしっかり踏まえた上で、教科書の点字学習教材等を参考に、個々の児童の興味・関心、手指の使い方からその子の課題を見極め、一人一人の児童に必要な教材を選定、補充しながら児童が楽しんで学習できるよう指導を行うことが大切である。

点字指導の必要な対象は、盲学校に在籍する1年生、中途視覚障害児、重複障害児、さらには、通常の学級に通う盲児まで幅広く考えられる。彼らによりよい教科書を提供するためにも、これらの事項は点字教科書における触読導入教材の検討課題であるといえよう。

文 献

- 1) 大川原潔(1976)教科書百年の変遷。東京教育大学教育学部リハビリテーション教育研究施設。
- 2) 川本宇之介(1929)盲学校初等部国語読本巻一に就て。盲教育第2巻第1号、11-19。

- 3) 佐野保太郎 (1930) 東京盲学校内盲教育研究会盲教育の友第2巻第4号.
- 4) 文部科学省 (2000) 盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領解説—各教科, 道徳及び特別活動編—, 東洋館出版社.
- 5) 文部科学省 (2003) 点字学習指導の手引き, 大阪書籍.
- 6) 文部科学省初中局特別支援教育課 (2002) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 7) 文部科学省初中局特別支援教育課 (2005) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 8) 文部省 (1929~1934) 盲学校初等部国語読本巻一から巻十二.
- 9) 文部省 (1949) よにんのいいこ, 毎日新聞社.
- 10) 文部省 (1963) 「盲学校小学部国語」学習指導書, 日本ライトハウス.
- 11) 文部省 (1968) 盲児の感覚と学習.
- 12) 文部省 (1974) 盲学校学習指導要領解説, 東洋館出版社.
- 13) 文部省 (1975) 点字学習指導の手引, 東山書房.
- 14) 文部省 (1983) 特殊教育諸学校学習指導要領解説—盲学校編—, 東洋館出版社.
- 15) 文部省 (1984) 視覚障害児の発達と学習, ぎょうせい.
- 16) 文部省 (1987) 視覚障害児のための言語の理解と表現の指導, 慶應通信.
- 17) 文部省 (1992) 特殊教育諸学校学習指導要領解説—盲学校編—, 海文堂出版.
- 18) 文部省 (1995) 点字学習の手引 (改訂版), 慶應通信.
- 19) 文部省初中局特殊教育課 (1974) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 20) 文部省初中局特殊教育課 (1977) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 21) 文部省初中局特殊教育課 (1980) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 22) 文部省初中局特殊教育課 (1983) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 23) 文部省初中局特殊教育課 (1986) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 24) 文部省初中局特殊教育課 (1989) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 25) 文部省初中局特殊教育課 (1992) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 26) 文部省初中局特殊教育課 (1996) 盲学校小学部点字教科書編集資料.
- 27) 文部省初中局特殊教育課 (2000) 盲学校小学部点字教科書編集資料.